

はどうなんだい。」

猿はこれを知るとにわかには腹をおさえて、ウーンとうなり出した。

猿 「蛙どん、おれな昨日から腹が痛くてえんで困ってるんだ。一、三日したらよくなっぺからひとりできつてくれねえか。」正直な蛙は「腹が痛ていときは誰でもできねいな、ほんじゃらおれだけでやつべ。安心して早くよくなれや」と別れ、蛙はそれからわき目もふらず一生懸命苗代づくりに精出した。

苗代はできた。さあ次は種まきだと猿を訪ねた。猿は蛙の姿を見るが早いか、顔をしかめ「この前の腹の痛いのがまだよくなっていいんでなあ、ああ痛てい、痛てい。」蛙はせつせと糶をまき、水をかけたり干したり丹精こめて苗を育てていった。

田植えである蛙はまた猿を訪ねていった。今度は木から落ち腰をしたたかうったので昨日から休んでいるのだと寢床に急にもぐり込んでしまった。蛙はやむなく苗の延びを楽しみに手入れに余念がない。いよいよ田植えである。猿はその約束日にもとうとうこなかった。それから暑い日盛りの草とり、やがて秋である。ずっしり実った稲穂を見て蛙は一生懸命働いた甲斐があったとご満悦である。秋のとり入れもすっかり終った。それでも猿は一度も顔を見せなかった。米俵を見て蛙は猿を訪ねた。「もち米もたくさんとれたし、明日餅つきしようと思つたんだが猿どん都合はどうだべない。」猿はこんどは大よろこび「それはよかんべい病氣もよくなつたし、おれつくから用意を頼む。」と、猿は大はしゃぎである。さてその翌日餅つきである。だが一寸までよと猿は考えた。このうまい餅を蛙に食はれてはもつたない、これは一つこでお猿様の知恵を絞つておれ一匹で食つてやろうと考えた。そこで蛙にむかつて「なあ蛙どんや、そこでただ食つてしまっ